

平成 31 年 3 月 31 日

立正大学地球環境科学部環境システム学科

立正大学大学院地球環境科学研究科部環境システム学専攻

環境気象学分野

立正大学環境気象学分野吉崎正憲教授が定年退職

～「総観気象学研究室」を主宰し「掌サイズ積乱雲」「日本ミツバチ」を追求～

立正大学地球環境科学部環境システム学科/立正大学大学院地球環境科学研究科部環境システム学専攻の環境気象学分野の吉崎正憲（よしざきまさのり）教授が、平成 31 年 3 月 31 日付けで定年退職した。



吉崎正憲教授近影

吉崎教授は、東京大学大学院理学系研究科在籍中の昭和 50 年 11 月に東京大学海洋研究所助手として採用され、平成 2 年 4 月に気象庁気象研究所に移った後は同研究所主任研究官を歴任し、平成 18 年 3 月末日まで気象研究所予報研究部第一研究室長として活躍した後、同年 4 月 1 日付で独立行政法人海洋研究開発機構地球環境観測研究センター海大陸観測研究計画プロジェクトディレクターに就任し、平成 25 年 4 月 1 日付で立正大学地球環境科学部環境システム学科環境気象学分野教授に就任して今日に至っていた。昭和 56 年 12 月に東京大学にて理学博士の学位を取得しており、大気力学が専門である。特に降水システム（メソ対流系）についての研究活動を精力的に継続してきた。

おもな著書として、『豪雨・豪雪の気象学』

朝倉書店（共著）や『地球環境の事典』朝倉書店（共編著）がある。

吉崎教授は、気象庁時代、科学技術振興機構・戦略的創造研究推進事業「メソ対流系の構造と発生・発達メカニズムの解明」研究代表を務め、それまで予報困難とされていた

メソ対流に対する理解を観測とモデリングにより大いに進展させた。海洋研究開発機構に移ってからは、熱帯気候変動研究のリーダーとして、インド洋からインドネシア多島海を経て西太平洋に至る海域とその周辺で、降水雲やそれを取り巻く大気・海洋の状態を、陸上、船舶、航空機などから多元的に観測し、降水システムのメカニズムや降水システムとエルニーニョなど地球規模の気候変動との関係を明らかにするための研究を推進した。

立正大学着任後の吉崎教授は「総観気象学研究室」を主宰し、従来の研究活動を継続・集大成するとともに、その成果を活かして「手のひらサイズの積乱雲作成」を新たな研究テーマとし、エネルギー問題および水資源問題への貢献をも目指す教育研究活動を展開した。立正大学に在籍した6年間に、以下の業績（著書2篇、論文14篇）を残した。

（著書）

『環境のサイエンスを学ぼう ―正しい実験実習を行うために―』丸善プラネット（分担執筆），
2016.

『地球環境の事典』朝倉書店（共編著），2013.

（論文）

Sensitivity of quasi-stationary band-shaped precipitation system to topography: A case study for 28 August 2008 Okazaki heavy rainfall event.（共著）*J. Meteorol. Soc. Japan*, **97**, (in print), 2019.
DOI:10. 2151/jmsj.2019-026.

理想化されたaqua-planetにおけるNICAMの結果とJRA-55のデータにより解析した対流圏における気温の鉛直分布と気温減率の特徴.（共著）地球環境研究, **21**,（印刷中）, 2019.
1966年3月5日の富士山風下側に見られたはね水現象―BOAC機墜落事故時の大気環境―.
（共著）地球環境研究, **21**,（印刷中）, 2019.

ドップラーライダーと温度センサーを付けたドローンによる同時観測.（共著）地球環境研究,
21,（印刷中）, 2019.

流体運動に見られる共振現象とは？.（共著）天気, **65**, 123-129, 2018.

長野市におけるドップラーライダーを用いた山風の観測とWRFによる数値実験.（共著）地球環境研究, **19**, 63-71, 2017.

Comparison of Models Having Positive-only Wave CISK with the NICAM Outputs about Eastward Propagation of Super Clusters in the Equatorial Region ―Part 1. Approach from a Full Model―.
（単著）*Bulletin of Geo-Environmental Science*, **18**, 1-15, 2016.

Comparison of Models Having Positive-only Wave CISK with the NICAM Outputs about Eastward Propagation of Super Clusters in the Equatorial Region ―Part 2. Approach from a Simplest Model―.（単著）*Bulletin of Geo-Environmental Science*, **18**, 17-27, 2016.

立正大学・熊谷キャンパスにおけるドップラーライダーによる水平風の観測.（共著）地球環境研究, **18**, 49-55, 2016.

二次元非発散渦度方程式の差分形について.（共著）地球環境研究, **17**, 101-105, 2015.

書評 木村龍治『変化する地球環境 ―異常気象を理解する―』左右社.（単著）天気, **61**, 454,

2014.

ローレンツ・カオスの理解の仕方. (単著) 天気, **61**, 205-209, 2014.

大気力学に表れる 2 階線型常微分方程式の解法: 非標準形から標準形への変形. (単著) 地球環境研究, **16**, 57-63, 2014.

コリオリカの「ユリイカ」. (単著) 天気, **60**, 119-124, 2013.

また, 学会活動の一環として, 立正大学在任中, 日本気象学会 SOLA 編集委員会委員を務めた.

教育業績としては, 「気象と水の科学 (分担)」, 「環境気象学概論 (分担)」, 「総観気象学」, 「大気環境シミュレーション」, 「温暖化と酸性雨」, 「環境流体力学」, 「物理学 I」等の授業を担当するとともに, 卒業論文 30 篇の指導にあたった. 吉崎教授は立正大学大学院地球

環境科学研究科環境システム学専攻気圏環境学分野 D[Ⓔ] 教授として, 同分野博士前期課程

および後期課程の研究指導も担当し, 1 篇の博士学位請求論文の主査と 1 篇の博士学位請求論文の副査, および 3 篇の修士学位請求論文の主査と 3 篇の修士学位請求論文の副査を務めた. また, 可搬型ドップラーライダーや GPS ゾンデシステムの導入に先導的な役割を果たし, 環境気象学分野における教育研究環境の整備・充実に貢献した.

校務分掌としては, 地球環境科学部環境研究所長 1 期 2 年 (2014-2015 年度) および地球環境科学部環境システム学科主任 1 期 2 年 (2016-2017 年度) 等の要職を歴任し, 地球環境科学部および環境システム学科の発展に大きく貢献した.

また, 吉崎教授は, 着任後新たに養蜂同好会を設立してその顧問に就任し, 立正大学熊谷キャンパス露場の片隅に巣箱を設置して日本ミツバチの飼育に取り組んだ. ミツバチの活動と気象の関係を究明するとともに, 熊谷キャンパスの新たな特産品開発を目指すユニークな活動を展開した.

上記の如き業績を上げてきた吉崎教授を失うことは立正大学環境気象学分野の教育研究体制にとっては大変な痛手であるが, 定年制は学園上位規程であるため致し方ない. 立正大学環境気象学分野としては, 早急に吉崎教授の後任人事を進め, これまでの 4 名体制の維持・継続を図る所存である. 吉崎教授には, 退職後も, いくつかの授業科目の非常勤講師を務めて頂き, 立正大学環境気象学分野の教育研究を支援して頂く所存である.

以上, この度定年退職される吉崎正憲教授を顕彰するとともに, 吉崎教授の第 2 第 3 の人生が充実したものになることを残された立正大学環境気象学分野教員一同心より祈念する次第である. 吉崎正憲教授, 長い間本当にありがとうございました. 今後ともお元気で活躍頂きご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い致します.

背景

吉崎教授が所属していた立正大学地球環境科学部環境システム学科環境気象学分野は、個々の教員の教育・研究活動とともに、熊谷～高崎・前橋にかけて関東平野北西部猛暑の発生メカニズム解明を目的とした観測的研究やコンピュータシミュレーション解析研究を推進してきた。組織的な積乱雲による中規模の現象を専門とする吉崎正憲教授，ヒートアイランド等の地表面熱収支の差に起因する比較的小規模な現象を専門とする中川清隆教授，ロスビー波砕波等の大規模な現象を専門とする渡来靖准教授に，メソ循環系ダウンスケーリングを専門とする鈴木パーカー明日香助教を加えた立正大学地球環境科学部環境システム学科環境気象学分野は，バランスよく各分野の研究者 4 名が揃った私立大学としては屈指の気象教育機関である。

立正大学地球環境科学部環境システム学科の卒業要件総単位数は 126 単位だが，環境気象学分野で卒業論文を執筆して卒業する際における気象学関連のカリキュラムにおける必修科目および選択必須科目は以下の通りであり，卒業までの修得単位数は最低 30 単位，最大 40 単位に及ぶ。

学部 1 年必修科目

- 気象と水の科学 (2 単位)
- 環境気象学概論 (2 単位)
- 環境調査の基礎および実習 (2 単位)

専門科目 A 群 (学部 2 年 8 単位必修)

- 気候・気象学 (2 単位)
- 総観気象学 (2 単位)
- 大気大循環論 (2 単位)
- 環境気象学実習 (2 単位)

専門科目 B 群 (学部 2～4 年 6 単位選択必修，それ以上の単位もすべて卒業要件単位)

- 気候変動論 (2 単位)
- 微気象学 (2 単位)
- 大気環境モニタリング (2 単位)
- 大気環境シミュレーション (2 単位)
- 温暖化と酸性雨 (2 単位)
- 都市大気環境 (2 単位)

----以下 2 科目は気象分野選択必修科目ではないが，気象分野教員が担当----

- 環境流体力学 (2 単位)
- シミュレーション技術 (2 単位)

学部 3 年必修科目

- セミナーの基礎 (2 単位)
- セミナー (4 単位)

学部4年必修科目

卒業研究指導（卒業論文含む）（4単位）